

—最新DXを医師の働き方改革に活かす—

カンファレンスの時短を実現させる統合型画像診断支援システム Abierto Cockpit

古家 乾 JCHO北海道病院 院長



DX導入の目的は、医療の質を落とさず業務効率を高めること。キヤノンメディカルシステムズのAbierto Cockpitは、ベンダーに依存せず多種多様な患者情報を統合し、わかりやすく表示してくれる次世代DXシステムである。Abierto Cockpitが診療の現場にもたらすインパクトとベネフィットを、札幌市南部の地域医療をになうJCHO北海道病院 院長 古家 乾先生に伺った。

Q1 導入のきっかけからお聞かせください

医師の働き方改革実践のために

いま、医師の働き方改革が病院経営上急務になっています。それには複数の医師間や多職種間の情報共有が必要なのですが、情報は電子カルテから各部門システムまで多岐に分散し、統合的に俯瞰できず適切なタイミングで参照することもできません。これでは業務効率の改善は望めません。この環境を変え医師の働き方改革を実現する目的で導入したのがAbierto Cockpitです。

Q2 Abierto Cockpitにどんなメリットをお感じですか?

医師の業務のストレスを軽減

DICOM画像はもちろん、内視鏡やエコー、眼底検査などの非DICOM画像あるいは心電図や呼吸機能検査、生理検査、バ

イタルや採血、投薬など、テキストデータを含む多種多様な情報を取り込むことができます。取り込んだ情報は患者さんごとに時間経過の順で統合して表示されます。統合された情報に一覧性よくアクセスし、素早く情報を参照できることができます。操作も直感的で簡単ですから、日常業務のストレスが軽減されます。

同じ操作を繰り返す無駄をなくした

患者情報は外来診療で使うだけではありません。複数の医師や他の職種が参加するカンファレンス、あるいは患者さんとご家族へのインフォームドコンセントにも使われます。これまでさまざまなシチュエーションでその都度、該当する情報のありかを探し、システムを開き、目的のデータを見つけ出し、表示する、同じような操作が何度も必要でした。Abierto Cockpitはボタン一つでこれら一連の操作を登録し、再現することができます。同じことを繰り返す無駄がなくなりました(図1)。

効果は、カンファレンスで66%の時短を可能に!

大きな恩恵を受けたのはカンファレンスです。カンファレンスの準備と実施に要する時間が劇的に短くなったのです。

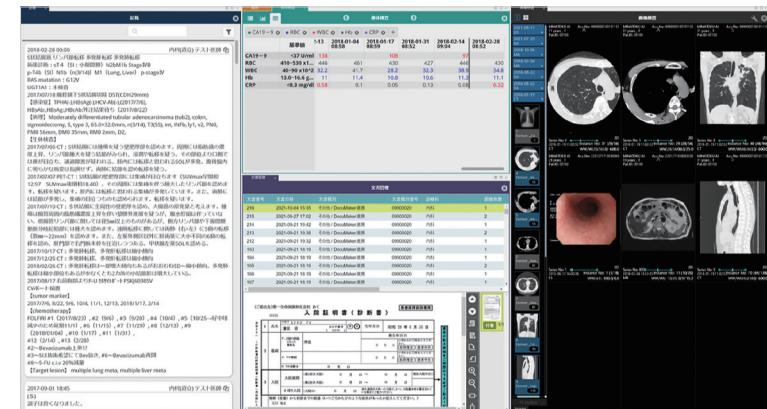


図1 Abierto Cockpit

右の画面で過去のキー画像がボタン1つで見れる。これがカンファレンス時短の秘密だ。



JCHO北海道病院

院長:古家 乾／住所:札幌市豊平区中の島1条8丁目3番18号／TEL:011-831-5151

札幌市民の憩いの場である豊平川に隣接した閑静な地に位置し、藻岩山をはじめ南西部に連なる山々の四季折々の景色を間近に眺めながら入院ができる絶好の環境に恵まれています。

札幌市中心部のTV塔からも5kmほどの地域中核病院であり、札幌市豊平区を中心に札幌市の南部地域、約50万人の住民を対象とした急性期対応の高度医療を提供できる病院として、保健、医療福祉の各分野で、住民の皆様に十分満足していただけるサービスの提供に努めています。

当院の消化器センター合同カンファレンスの例をご紹介しましょう(図2)。導入前の患者1人当たり複数回のカンファレンス所要総時間は75.8分。それが導入後26.1分になりました。2回目以降の準備が不要になり実に49.7分の削減、66%の時間短縮となりました。正直、この効果には驚きました。

Q3 カンファレンスではAbierto Cockpitのどんな機能が役に立ったのでしょうか?

情報共有の手間と時間を削減したスナップショット

カンファレンスは顔を合わせることが

少ない医師同士あるいは看護師、理学療法士、臨床検査技師、診療情報管理士など関連職種の方々がチーム医療の一員として集まります。主治医は関係者に見てもらいたい情報、フォーカスすべきことからをチーム全員に共有する必要があるのです。例えばMRIなら病変が最も端的に描出されたシーケンスのキー画像。これを医師が事前にスナップショットで登録する。そのほかのキー情報も一連のセットとして登録しておきます。当日はボタンひとつでセットを呼び出せば、瞬時に必要な情報を時系列で一覧表示してくれる。情報共有の難しさとわずらわしさを一举に解決できます。またセットを事前に参加者に提供しておけば予習ができます。予習することで短いカンファレンス時間の質が高まる。患者さんとご家族へのインフォームドコンセントでもまったく同様です。手間暇かけずに質の高い説明を効率よく行えるようになりました。

Q4 そのほか、現場で役に立っている機能があれば教えて下さい

ルールベースアラームで問題発生に迅速・的確、見逃しなく対応

患者の問題発生に的確に対応することも医師の大切な業務です。そこでたとえば術後管理の場合、採血でヘモグロビン値が○○以下になった、体温□□度以上の熱が出た、酸素飽和濃度△△%以下になった、などのルールを設定して異常値が出たら自動でアラームを出すのがルールベースアラームです。病棟に置いた各科の電子カルテを全部開かなくても、正常値を逸脱した患者さんたちの一覧がポンと表示されます。項目や閾値をカスタマイズしたり、複数のルールを組み合わせたり、色付けしてわかりやすくすることができます。朝、外来に行く前にぱッと見てチェックすれば、異常が出た患者を見逃さず集中的に短時間で指示が出せる。看護師は値の変化が大きい患者を医師に注意喚起できる。労力をかけず効率よく、医療の質の向上につながっています。

ケアプロセスの記録と活用にも使える

ケアプロセスの記録と活用にも使えるので助かっています。たとえば病院機能評価で、患者にいつどのような介入・処置をして何をどう説明したのかというケアプロセスの記録情報が求められることがあります。時間を遡って患者の過去データを引っ張り出すのは大変な労作ですが、Abierto Cockpitに患者毎に時間経過で一覧できる記録が保存されています。いつでも誰でも簡単に対応できるので助かります。

Q5 最後に、これからのDXに対する期待と将来展望をお聞かせください

激変するこれからの医療DX

AIやクラウド、5Gや6Gといった次世代技術の導入が始まっています。国や自治体は2030年に向け次世代の医療基盤構築を進めています。激変する技術革新

と医療環境を先読みしながら、積極的に業務改善を行い地域医療に貢献したい。それには医師のみならずベンダーの意識改革も必要でしょう。これから時代、従来に縛られた閉鎖的な発想では立ち位置を維持することは難しい。変化を味方に、ユーザと一緒に走りながら良いものを作り、柔軟な姿勢が大切。キヤノンにはそこを期待しています。

鍵を握る共生という考え方

餅は餅屋という言葉があります。めまぐるしい変化の時代、ひとつの会社が自分の力だけでゼロから製品を造りこむのは限界があります。自社の製品が自分自身を縛り、ひいては顧客を縛りかねません。最近、オファーリングビジネスという言葉を耳にしますが、Abierto Cockpitはその考え方を先駆けていますね。どのベンダーとも上手に連携できるインターフェイスを作り、必要なものを集めニーズに合わせ上手に提示する。ユーザは、ベンダーと一緒に製品を育て、そこで得られた恩恵を患者や地域医療に還元する。まさにキヤノンが言う「共生」という言葉を、Abierto Cockpitで実感しています。

実施回数	実施内容	従来	Abierto Cockpit
1回目	初回主治医準備	7.8	8.1
2回目	消化器内科カンファレンス	13.6	3.6
3回目	術前カンファ (キャンサーボード)	13.6	3.6
4回目	多職種カンファ	13.6	3.6
5回目	看護師、OT・PT、診療情報管理士参照	13.6	3.6
6回目	本人とご家族のインフォームドコンセント	13.6	3.6
総時間 (分)		75.8	26.1

図2a JCHO北海道病院消化器センター1名の患者に実施されるカンファレンス(準備と所用)時間の比較

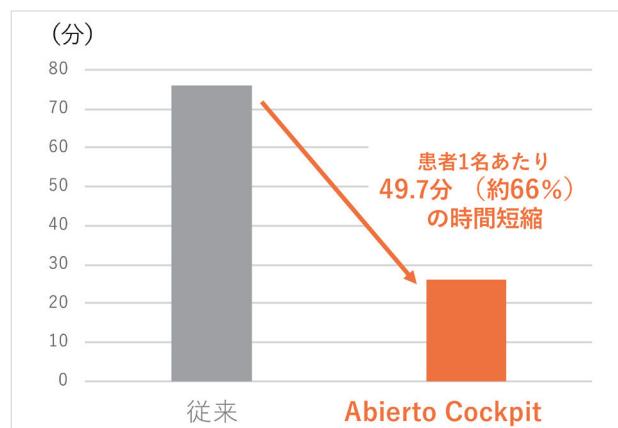


図2b 6回行われたカンファレンスの総時間